

vol.
171

今月のお題

……… 赤い星の話

火星は赤い、赤いは火星。でも、本当は赤色じゃあないですよ。なぜ、赤くないものを赤と呼ぶのか。もっと他の可能性はあったりしないのか、ちよびっと考えてみました。

高梨直純 (東京大学) / 平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

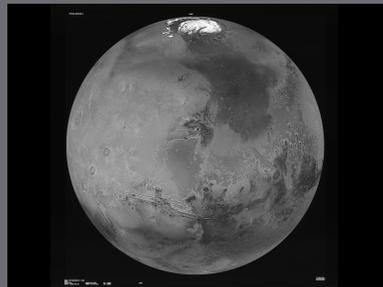
火星の接近に合わせてなにか赤い話でも…というリクエストを編集部からいただきました。確かに火星接近は大きな話題。天プラ的にもなにか乗っかりたいところですが、そもそも火星って赤い…のかな。

確かに観望会などで案内する時はつい「あの赤い星が火星ですよー!」と言ってしまいますが、実際の色は橙の方が近いですね。ベテルギウスだって同じような色味なのに、赤いって言うじゃないか!という声も聞こえてきそうですが、ベテルギウスの場合は黒体輻射(星の温度)で説明される色なので、橙の先に赤がつながっています(虹を思い出してみてください)。セーフ、セーフ。しかし、火星の場合は地表の酸化鉄の色なので、いくら錆びたところでいわゆる「赤」にはなりません。これは、やっぱりアウトでしょ。

そんな橙色をした火星なのに、それを赤だと主張しても特に違和感がないの

はなぜなのでしょう。その理由のひとつは、色の持つイメージかもしれません。古代ローマでは火星は軍神マルスの象徴とされていましたが、戦争の血のイメージと括りつけて考えるならば、火星はやはり赤だというのは納得のいく話。血の赤、不吉な赤、禍々しい赤…。火星にとっては迷惑な話でもあります。

でも、それはあくまで古代ローマと、その文化の影響を色濃く受けた西洋での話。東洋に住む私たちが、火星を赤と言う理由にはちと弱い。では東洋ではなにか根拠になるものはないのかと見渡してみれば、古代中国で唱えられた五行説がまさにそれ。森羅万象の源たる「木火土金水」の五要素のうち、火星は「火」の要素に括りつけられています(そもそも火星の名前の起源)。それと同時に、赤色も「火」に括りつけられているため、この「火」を介して火星を赤と主張するのは自然の成り行きと言えるでしょう。



火星は赤い? (Photo Credit: NASA)

でも、そういうルールに従って「赤」と言っているだけなら、「火」カテゴリの他の要素と絡めて火星を語っても良いのでは?例えば五感なら「舌」、五穀なら「麦」(諸説あり)、五畜なら「羊」、五果なら「杏」、五情なら「楽」などが、それぞれ「火」に括りつけられたイメージです。うーん、おいしそうな香りがしてきそう…。「あの杏のような星が火星ですよー!」と説明するだけで、火星に対する印象はかなり変わるかもしれません。久々の火星接近、ぜひお試しあれ。